The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	表現活動と表現活動主導の第二言語教育
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2017, 21, p. 37-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60432
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第21号（2017）

表現活動と表現活動主導の第二言語教育

西口　光一*

要　旨

バフチンは、対面状況で交わされる短いことばから大部の小説や学術論文までを含めて、主体の交代によって画定される言語活動の単位を発話と呼んでいる。どのような発話も行為であり、能動的で実践されるものである。そして、それは特定の話者が特定の意味を伝達する局所的必要性と、一般システムとしての言語の総体的要請との間の交渉の下に実行される。発話はそれらへの応信性に基づく行為である。そして、後に意味づけられる産物を生成するところから、応信性はすなわち表現性となり、発話行為に従事することはそのまま表現活動となる。表現活動主導の第二言語教育は、言語的な教育内容を表現活動というトータルな過程の一部として作動するものと位置づけた上で、それよりもむしろ表現活動を中心に据えて活動全体を応信性が串刺し貫くように教育を企画する教育の方略である。

【キーワード】表現活動、ことばのジャンル、対話原理、応信性、表現性

はじめに

大阪大学国際教育交流センターでは2010年から基礎段階の日本語教育として自己表現活動中心の日本語教育を企画し実践している。一方で、細川を中心とするグループは2000年前後から学習者主体中心の教育という理念の下に総合活動型日本語教育の実践と実践研究を精力的に展開している（細川, 1994; 2002）。この２つの新たな日本語教育実践の試みは、表現活動主導の教育として包括することができると見られる。本稿では、本センターで実践してきた自己表現活動中心の基礎日本語教育において想定されていた表現活動を主題として論じる。その上で、表現活動主導の第二言語教育とは何かについて詳細に議論する。

第１節は、素朴なコミュニケーション・モデルから論を起こす。そのコミュニケーション・モデルは、一般的でよく流布しているコミュニケーション・モデルであり、言語教育の専門家でもしばしば意識的にあるいは無意識的に想定するモデルである。そのようなモデルに基づく第二言語教育の企画と実践は、ソシュール的パラダイムと呼ぶことができるだろう。しかし、素朴なコミュニケーション・モデルは、そもそも思考はどのように存立するのかという根本的な問題を抱える。その問題について本稿では、思考と心理の存在形態に関わるバフチンの議論に基づいて検討し、思考を含む心理の現実は内的発話の現実であるとの見解に至る。そして、バフチンの言う発話とは何かを明らかにし、発話の構成に関与する重要な要因としてことばのジャンルという概念を提示する。

次に、第２節では、応信性と表現活動について論じる。発話はその本質として「先行する何かを承けて誰かに向けて発する」という性質を有する。ホルクイストはこの中の「何かを承けて」の部分に注目して行為としての発話に関わる先行因について論じている。そして、「つねにすでにそこにある」言語システムと「私が占める特定の場所に対して私が責任を負うことを必要ならしめる全存在」という２つの

＊ 大阪大学国際教育交流センター教授

要因を特定する。前者の重要な側面としてバフチンはことばのジャンルの働きを論じている。そして、後者をホルクイストは「私」に宛てて送られる存在とし、発話を出来事としての「私」として論じている。そして、その議論の流れで応信性は表出性であるという見解が提示される。議論はさらに行為としての発話の産物の議論へと展開し、バフチンの言う行為としての発話はそのまま表現活動であるという見解へと至る。

第３節では、前節の議論を基盤として表現活動主導の第二言語教育について論じる。はじめに表現活動主導の第二言語教育とは何かについて、その企画と実践の様態について述べる。次に、発話の生成とそれに連動する認識の構造の組織化が論じられ、表現活動主導の第二言語教育は各学習活動での教育内容よりもむしろ、表現活動を中心に据えて、活動全体を応信性が串刺し貫くように教育を企画する教育の方略であることを論じる。

1　表現活動とことばのジャンル

1-1　素朴なコミュニケーション・モデル

最も一般的でよく流布している素朴なコミュニケーション観は、コード的なコミュニケーション観である。このコミュニケーション観は、Shannon and Weaver（1949）のコミュニケーション・モデル（図1）と重ね合わせることができる。

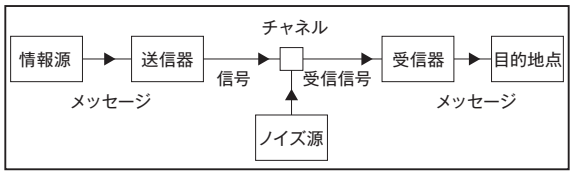

図１　Shannon and Weaver（1949）のコミュニケーション・モデル

このモデルに従って言うと、情報の送り手つまり話し手は、まず何らかの条件下でメッセージを生成する。メッセージは人の場合は仮に思考と言っておいてよいだろう。メッセージは送信器（transmitter）に送り込まれ、その装置の働きで信号すなわちコードに変換されて発信される。送信器の働きは、人の場合では、思考を言語記号に変換してそれを発声器官で調音して発する言語心理過程と心理運動過程の複合となる。そして、そのようにして発信された信号はチャネルを通って受け手に達する。人の言語の場合は、調音された空気の振動として聞き手に達することになる。到達した信号は受け手側の受信器（receiver）に入り、そこでコード解読されて元のメッセージに変換されて目的地点に到着する。言語の場合では、聞き手の耳に入って、その後に音韻解析や統語・語彙解析などを経て、メッセージつまり当初の話し手の思考が得られることになる。つまり、このモデルでは、発信者側に思考があってそれを言語コード化して、それを受信者が受け取ってコード解読して受け取るという思考や考えの伝達の流れがコミュニケーションとなる。そして、思考を言語表現に変換する部分が表現活動となる。

このコミュニケーション・モデルは、しばしば直截に第二言語によるコミュニケーション観にも適用される。発信者を第二言語学習者とするならば、コミュニケーションとは、当初の思考は何らかの形でそこにあって、それを第二言語に変換して発信することとなる。そして、その産物は言語表現であり、そのような表現を産出する変換の過程がそのまま表現活動と見なされる。

ソシュールは、ラング（langue）とパロール（parole）の関係について次のように論じている。

> パロールは意志と知能の個人的行為であって、これにはつぎのものを識別してしかるべきである。(1)話手がその個人的思想を表現する意図をもって、言語の法典を利用するさいの結合、(2)かれにそうした結合を表出することをゆるす精神物理的機構。（ソシュール, 1916/1972, pp.26-27）

ソシュールの言語観に従って言うと、言語話者は当該の言語について、Shannon and Weaverの図の送信器や受信器に当たるような装置あるいは知識を持っていることになる。それがまさに、バフチンが規範的に自己同一的な言語形態の体系（system of normatively identical forms、バフチン, 1929/1980）と呼ぶソシュールのラングである。そして、それが個々の話し手を超えて「同じ」であることが、正確な言語コミュニケーションを保障することになる。これから新しい言語を身につけようとする者は、目標言語のラングを持っていない。ゆえに、ラングの習得をめざして言語の学習を行うのが、言語の学習である、となる。ソシュールによると、ラングの内容は音声と語

彙と文法ということなので、新しい言語を身につけようとする者は、当該言語の音声と語彙と文法についての正しい知識を身につけるべく言語を学習しなければならない、となる。もちろん、書記言語も習得しようとするなら、文字や表記法も含まれることになる。これが第二言語の学習と教育におけるソシュール的パラダイムである（西口，2013）。

1-2　思考と心理の現実

コード的なコミュニケーション観には根本的な課題がある。思考はそれを支える何の素材もなく存立するのかという問題である。また、そのコミュニケーション観に基づく第二言語教育に関しては、第二言語学習者の場合は第一言語を素材とした思考があってそれを第二言語に変換するのが第二言語の能力であると考えてよいかという問題である。後者の問題については第３節で論じるとして、本節では前者の問題について検討する。

客観的心理学ということについて議論している部分でバフチンは次のように論じている。ここに言う主観的心理や心理は、上に言う思考を含むものとなる。

> 主観的な心理は、自然的所与としての動物的な、自己完結した生体の内部で生起するいかなる過程にも還元することのできないものです。心理の内容を根底から決定している過程は、生体の内部で生起する過程ではなく、個々の生体がそれに関与するとはいえ、生体の外部で生起するような過程です。（バフチン，1929/1980，pp.52-53）

そして、内的心理の現実は記号の現実であるとして、上の「生体の外部」を「生体と外部世界のはざまのごとき場所、この２つの現実領域の境界線上」と言い換えて、次のように説明している。

> 内的心理の現実とは、まさしく記号の現実です。記号という実体をのぞいては、心理はありません。…これは、生体のうちで営まれる生理的な過程とも、生体を取りまき、心理がそれに反応し、なんらかの仕方でそれを反映する外部の現実とも、根本的に違うものです。主観的心理は、その存在の場を、いわば、生体と外部世界とのはざまのごとき場所、この２つの現実領域の**境界線上**にもつものです。その境界線上で、生体と外部世界とが出会うわけです。…生体と外部世界とは、この境界領域で記号を介して出会うのです。心的経験なるものは、生体と外部世界との接触の、記号による表現にほかなりません。（同書pp.53-54、太字による強調は原著、傍点は筆者、以下同様）

バフチンは、テーマをさらに拡大して経験について論じている。バフチンは言う。もし経験が単に一回限り生起した事象というだけでなく意味を持つとすれば、経験は必然的に記号という実体を基盤にして成立せざるを得ない（同書p.58）。そして、外部に出して実行される発話＝外言と外部に出されることのない発話＝内言に関連する議論として、経験はそれを他の人のために外部に表現する場合以外に、経験する当人自身にとっても記号という媒介を介することではじめて存在するし、現に存在していると論じ、心理とともに経験も記号という実体の外でそれとして独自に存在するということは全くありえないと主張する（同書p.59）。そして、最後に記号の中でもことばと心理との関係について論じている。

> 発達し細かく分節された心理にとっては、いずれの場合も、微妙でしなやかな記号が不可欠です。しかも、その記号は〔身体の内側ではなく〕その外部に、社会的環境での外的表現の過程で、形成され、正確な表現となり、分節化されうるような記号でなければなりません。そこで、心理の記号媒体となるのは、〔様々な記号のうちでも〕とりわけ言葉です。つまり、**内的発話**です。（同書p.61）

かくして、思考を含む心理の現実は内的発話となる。つまり、記号やことばの支えがなければそもそも思考や心理は存立できないのである。

1-3　発話、言語の総体的要請、ことばのジャンル

では、発話とは何か。バフチンは、対面状況で交わされる短いことばから大部の小説や学術論文までを含めて、主体の交代によって画定される言語活動の単位をすべて発話と呼んでいる（バフチン，1952-53/1988，pp.136-137）。そのような発話が、言語がダイアローグとして考えられるときに分析のテーマとなる。つまり、言語それ自体（ラング）とは対比的な意味でのコミュニケーションを研究する者にとって発話が探究の基本単位となるのである（ホルク

イスト，1990/1994，pp.86-87）。

ホルクイストの言うように、バフチンの言う発話は「能動的であり、実践されるものである」（同書p.87）。その能動性や実践性は、特定の話者が特定の意味を伝達する局所的必要性と、一般的システムとしての言語の総体的要請（global requirements of language as a generalizing system）との間の交渉の下に実行される。発話は「つねに、先行するさまざまな拘束を相手になされる」（同書p.87）。言語の総体的要請には、言語学で明らかにされている音素、語、句構造、統辞もあるが、バフチンが強調するのはことばのジャンルである。

> 人間の活動領域はさまざまであり、活動領域のすべてが言語の行使と結びついている。そして、そこで行使される発話は、それぞれの活動領域の特殊な条件と目的を何よりもまず発話の構成に反映している。そして、言語の行使のどの領域も、発話の相対的に安定した諸タイプを作り上げている。それがバフチンの言うことばのジャンルである（バフチン，1952-53/1988，pp.115-116）。

バフチンによると、わたしたちはことばのジャンルでもって話す。そして、わたしたちは話し言葉と書き言葉のジャンルの豊かなレパートリーを持っていて、ことばのジャンルを確信を持って巧みに使い分けている。しかし、ことばのジャンルの存在そのものについては気づいていない（同書p.148）。音素や語や句構造や統語なども発話を実践する際の拘束となるが、それらは直截に発話の仕方に関わるわけではない。それらはむしろことばのジャンルの下にある要素として発話に関わる。わたしたちは発話によって話すわけで、個々の文や語によって話すわけではない（同書p.149）。

ことばのジャンルは、端的に言うと、発話の構成原理であり発話の可能性である。これまでの人生を通して蓄積した、さまざまな活動従事の経験とそれに関与した言語行使の経験の沈殿が、ことばのジャンルの総体である。そして、それはホルクイストの言う言語の総体的要請となって、具体的に発話を実践しようとするときに「つねにすでにそこにある」（ホルクイスト，1990/1994，p.87）。発話生成の過程はきわめて精妙で捕捉しがたいものなので、それはヒューリスティックな過程だと言っておこう。また、言語の総体的要請は、それが果たしている役割からすれば、発話の行使と発話の理解を可能にするリソース的知識と言うことができるだろう[1)]。

実際に外部に出して実行される発話＝外言と、外部に出されることのない発話＝内言とは同じ性質のものである（バフチン，1929/1980，pp.59-60）。ゆえに、上のような具体的な話し手における発話の生成の事情は、外部に出される発話＝外言の場合でも、外部に出されることのない発話＝内言の場合でも基本の部分は同様である。

2　応信性と表現活動

2-1　発話の2つの先行因

バフチンの対話原理の中の主要概念の一つである応信性（addressivity）についての議論では、「どの発話も必ず誰かに向けられている」や「誰にも向けられていない発話はない」のように、発話が誰かに宛てられているという性質が論じられることが多い。バフチン自身もしばしばそのように論じている。それに対し、ホルクイストは、「先行する何かを承けて発する」という観点で応信性について議論している。ホルクイストはその論拠として以下を挙げるだろう。

> どんな具体的な発話も、一定の領域における言語コミュニケーションの連鎖の一環なのである。…発話同士はたがいに無関心ではありえず、どれも己に満足しておらず、たがいに知り合い、たがいを映し出す。この相互の反映が発話の性格を決定するのである。（バフチン，1952-53/1988，p.173）

> **あらゆる発話は、それがいかに重大でいかに自己完結しているものであっても、（日常の・文学上の・認識上の・政治上のコミュニケーションという）途切れることのない言語コミュニケーションの一契機にすぎぬものです。**（バフチン，1929/1980，pp.201-210）

以下の引用は1-3のホルクイストの引用[2)]に続く部分だが、「承けて」の部分に注目して議論が展開されている。発話は、以下の引用では言表となっている。

> 選択を拘束するものが明らかになる最初の現われは、言表はけっして**それ自体**、起源ではないと

いう事実にある。言表はつねに応答なのである。言表はつねに、それに先行する別の言表に対する応答であり、それゆえ、程度の差こそあれ、先行する言表につねに条件づけられ、そして逆にそれを特定のものにする。何か特定のことを意味するより先に、言表は話し手の応信性についての一般的状況を表す。それは、「つねにすでにそこにある」言語システムが先行しているだけでなく、私が、私が占める特定の場所に対して私が責任を負うことを必要ならしめる全存在も先行しているという状況である。（ホルクイスト，1990/1994，p.87、一部改訳）

対話原理の議論において、発話は何かへの応答であるということはしばしば言われる（例えば、バフチン，1952-53/1988，p.173や同書p.175など）。しかしながら、その内実は必ずしも明らかではなかった。ホルクイストはここで、発話が応答なのであれば何が発話に先行しているのかという問いを立てて、それに答えているのである。ホルクイストによると、実践される能動的な行為としての発話においては、「つねにすでにそこにある」言語システムと、「私が占める特定の場所に対して私が責任を負うことを必要ならしめる全存在」という２つの要因が先行していると言う。このうちの前者は、1-3で論じたことばのジャンルを重要な要因とする言語の総体的要請に対応し、後者は同じく1-3で言及した特定の話者が特定の意味を伝達する局所的必要性に関連している。後者についてさらに検討しよう。

2-2 「私」に宛てて送られる存在と出来事としての「私」

ホルクイストは、対話原理に基づく人間の存在についての見方を、人間の存在を自己であるという出来事（event of being a self）として見る見方として捉えている（ホルクイスト，1990/1994，p.31）。「私」は、単に世界を受け取る郵便受けのようなものではなく、「私」そのものが出来事なのである（同書p.70）。「私」という存在は、「私以外」もそこにいる世界に常に呼びかけられる存在であり、それらに応える存在である。そして、世界の特定の場所にいて世界に応答し続ける絶え間のない行為がそのまま「私」を形作るのである。ホルクイストは言う。

世界はわれわれに呼びかける。そして、われわれがどこまで応答可能（アンサラブル）であるか、つまりどこまで呼びかけに応じられるか、その度合によってわれわれが人間として生きている度合も違ってくる。われわれは、応じるように**強いられている**、つまり世界に答えを返さざるをえないという意味で責任（レスポンシブル）がある。われわれひとりひとりが存在の中に、唯一のわれわれのものである場所を占める。私が存在にしめる場所の唯一性は、特権、バフチンが言うところの存在のアリバイであるどころか、もっとも深い意味における応答可能性（answerability、筆者注）である。その場所でのみ私は世界から呼びかけられる。私だけがそこにいるからだ。そしてそれだけでなく、われわれは生きているかぎり、応答を形成し続けなければならない。（同書pp.44-45、一部改訳）

さらに、ホルクイストは「世界」（the world）を一旦本源的な「存在」（existence）と言い換えて対話原理の人間存在論を以下のように総括する。

ダイアロジズムは存在を出来事として視覚化することから始める。この出来事は、私が存在の中に占める唯一の（それでいて変化し続ける）場所で存在が展開する際に、存在が呈する特定の状況に対して責任を負うという出来事である。存在は私に対して未定形の潜在的メッセージの奔流として発信される。…潜在的メッセージは、一部は原初的な生理学的刺激というかたちで、一部は自然言語というかたちで、一部は社会的コードもしくはイデオロギーとしてわれわれのところに達する。私は存在しているかぎり、特定の場所にいて、これらすべての刺激に対して応答しなくてはならない。その応答は、それらを無視するというかたちをとる時もあれば、意味づけ、つまりそのような表出から**意味**を生み出す――これは一種の作業であるので――というかたちをとる時もある。（同書p.69、一部改訳）

ここに言う潜在的メッセージ（potential message）とは「私」の意味づけ作業によって実際のメッセージとなる可能性を持つものという意味である。続いて、先にも言及した、「私」は郵便受けのようなものではないという議論になり、応信性のことが論じら

れる。

存在を「私にあてて送られる」ものとして理解することは、私がちょうど手紙が投げ入れられる郵便受けのような、出来事が降りかかる受動的な容器であることを意味するのではない。応信性はむしろ、**私が出来事である**こと、つまり私が通り抜けるさまざまな世界から送られる言表に絶えず応答する出来事であることを意味する。（同書 p.70）

存在はまだ意味づけられていない未定形のものである。そのような存在が「私」に宛てて送られたとき、「私」はそれを無視することもあるが、別の場合には、それを意味づけてそれに応答する。それが発話という行為である。出来事は、「私」に送られてくる不確定な流れを地とする安定した図として知覚できるものにならなくてはならない（ホルクイスト pp.36-37）。そのようにして「私」は「私」が通り抜けるさまざまな世界から送られる言表に絶えず応答する出来事となる。そして、そのようにする「私」と同じくそのようにする「私以外の人」が同時的にいて、実際の一つの出来事、バフチンの言葉では共存としての出来事（sobytie bytiya、英語で言うと event of co-being）が起こるのである（同書 pp.35-37）。応信性についての議論をホルクイストは次のように結んでいる。

応信性とは、**表出性**（*expressivity*）なのである。…ダイアロジズムにおいては生命とは表出である。表出とは意味の創出を意味する。意味は記号を媒介としてのみ生じる。これは存在のすべてのレヴェルにおいて真実である。何かが**存在する**のは、それが**意味する**場合にかぎられる。（同書 p.71）

以上のことから、発話に先行する第２の要因は、応信性に基づいて絶えることなく表出を続ける「私」の意識が関与する存在（existence）だということになる。そして、応信性は表出性であり、ダイアロジズムにおいては人として生きることは表出であり、生きることはそのように意味を表出し続けることとなる。そのように見るならば、応信性はそのまま、人が有して発揮する意味化作用（signification）だということになる。

2-3　行為としての発話の産物と表現活動

では、表出性である応信性の産物、あるいは行為としての発話の産物は何か。バフチンはそのような問いに対し、「呼吸、血液循環、身体の動き、調音、内的発話、顔面の動き、外部からの刺激、たとえば光の刺激に対する反応など…生体のうちにおこるすべてのことが経験を表現する記号となりうる」と一般的に答えた上で、「もっとも、これらの媒体が〔記号として〕同じ価値をもつわけではありません。発達し細かく分節された心理にとっては、いずれの場合も、微妙でしなやかな記号が不可欠です」と指摘し、心理の記号媒体となるのは「〔様々な記号のうちでも〕とりわけ言葉です」と主張している（バフチン，1929/1980，pp.60-61）。つまり、身体の動きや表情や目の動きなどと連動し評価のイントネーションに包まれた音声系列が行為としての発話の枢要な産物となる。この音声系列はそれを産出した主体にとっては現下の自身の心理として経験される。そして、その音声系列は、連動して表出されるその他の記号とともに、次に「あなた」が責任を負わなければならない全存在の一部として「あなた」に宛てて送られる。バフチンが言うように、発話は、「私」と「私以外の人」との間に架けられた橋であり、話し手と聞き手とが共有する共通の領域である（同書 p.188）。対面的相互行為はそのようにしてやり取りされる発話によって舵取りされて「一定の領域における言語コミュニケーションの連鎖」（バフチン，1952-53/1988，p.173）となるのである。

一方で、書記言語の場合は、書き記されたテクストが行為としての発話の産物となる。つまり、手紙や電子メールであれ、また論文や小説であれ、書き記されたテクストが、「私」に宛てられた存在への「私」の応答となる。そして、それは対面的な発話の場合と同じように、書き手と読み手とが共有する共通の領域となるのである。あらゆる発話は、それがいかに重大でいかに自己完結しているものであっても、日常の、文学上の、認識上の、政治上のコミュニケーションという途切れることのない言語コミュニケーションの一契機にすぎない（バフチン，1929/1980，pp.201-210）。

行為としての発話とその産物をこのように考えると、行為としての発話はそのまま表現活動となる。バフチンは言う。

生はその本質において対話的なものである。生きるとは即ち対話に参加すること――尋ね、耳を傾け、答え、同意したりすることである。この対話に人間は全身と生命活動のすべて――目、唇、手、魂、精神、身体のすべて、様々な行為――によって参加している。人は、自己のすべてを言葉の中にこめ、この言葉は対話的に織りなされた人間の生の中へ、世界の饗宴（シンポジウム）の中へ入っていく。（バフチン，1961-1988，p.262）

わたしたちは自己のすべてを込めた発話に従事することで対話に参加し、人としての生の中へ、世界の饗宴の中へ入っていくのである。

3　表現活動主導の第二言語教育

3-1　表現活動主導の第二言語教育とは何か

2-2のような議論を踏まえてホルクイストは言う。

水の欠如は渇きという反応がなければ何も意味しない。精神生活というもっとも高いレヴェルにおいても、反応を得るまではいかなることも何も意味しない、と同じように言える。換言すれば、応信性とは、**表出性**（*expressivity*）なのである。われわれが普通生命（ライフ）と呼んでいるものは、神秘的な活力ではなく、ひとつの活動であり、私が存在の中に占める特定の場所において、私に差し向けられるさまざまな出来事との間に起こるダイアローグであり、唯一の場所からそのような出来事に対して私の示す反応の表出なのである。（ホルクウィスト，1990/1994，p.71）

1-1で論じたように、従来の伝統的な第二言語教育では、目標言語の音声や語彙や文法についての正しい知識を習得することが主眼とされた。コミュニカティブ・アプローチの時代になって、社会言語能力や談話能力なども教育内容に含まれるようになり、教育方法としてペア・ワークやロールプレイなどの模擬演習的な練習も行われるようになったが、それまでのソシュール的パラダイムが大きく変化したとは見られない。表現活動主導の第二言語教育とは、学習活動全般を応信性が貫くように各種の活動がデザインされる教育の企画と、そうした応信性の脈絡で学習者の活動従事を促し支援し具体的な表現活動を促進し援助する第二言語教育の実践である。あるいは、学習者に注目して言うと、表現活動主導の日本語教育とは、学習者が常に一定の活動領域における言語コミュニケーションの連鎖の現場に置かれるように諸活動が組織化される第二言語教育の企画であり、上の引用でホルクイストが言っているように、学習者が「存在の中に占める特定の場所において、私に差し向けられるさまざまな出来事との間に起こるダイアローグ」に従事することを促し支援し、「唯一の場所からそのような出来事に対して私の示す反応」を発話として表出することを促進し援助する第二言語教育の実践である。

上の引用に続いてホルクイストは言う。

私が反応するのをやめ、**身動きもしない**（no signs of life）と――この英語表現は正確である――、私は死んだことになる。（ホルクウィスト，1990/1994，p.71）

これまでの第二言語教育の企画や実践は、バフチンやホルクイストが生きることの根源に関わる要因として論じている応信性や表出性に目を向けていなかったと言わなければならないだろう。表現活動主導の第二言語教育は、生きることのダイアローグに従事することを通して学習者一人ひとりがもう一つの言語による自身の声（voice、Holquist, 1981）を獲得し我が物とする中で、第二言語の習得と発達を促進しようとする教育の方略である。

3-2　表現活動主導という教育の方略

2-3では、発話やテクストを行為としての発話の産物として論じたが、その発話やテクストは「私」という認識論的な時間/空間の中心から組織化される多元的な認識の構造（ホルクイスト，1990/1994，pp.31-32）のいわば頂点としてあるいは表面として表出されるものである。ゆえに、応信性あるいは行為としての発話の産物は、実際にはそのように生成し組織化された認識の構造体の総体となる[3)]。ホルクイストはこのような事情を「認識論上の時間/空間は、まさに時間と空間の範疇が言語実践（スピーチ）の中で配備されるにつれて整序される」（同書p.33）と巧みに表現している。つまり、応信性は、まだ意味づけられていない未定形の存在の奔流を背景として、発話を実行することをめがけて働くのであり、発話はそれ

を支える多元的な認識の組織化を伴って実践されるのである。そして、その際には、もう一つの要因として1-3で論じた言語の総体的要請も同時に働くのである。応信性とは、このようなヒューリスティックな過程の全体のことである。

ゆえに、表現活動を教育し指導するというのは、何らかの仕掛けの下にこのようなヒューリスティックな心理的働きを学習者において作動させて、その人らしい表現の達成をめざした活動従事の機会を提供し、そのような脈絡で活動に関与するヒューリスティックな心理的働きに直接あるいは間接に介入してそれを支援し補充しつつ表現性を増強することとなる。しかしながら、上で論じたように、表現活動に介在するヒューリスティックな過程は多元的で複雑精妙でまた同時進行的で、それを捕捉することも体裁よく制御することも困難である[4)]。その上に、一つの言語をすでに習得していて新たな言語が習得途上にある第二言語学習者の場合は、そのようなヒューリスティックな過程が複言語的に行われるので（西口，2015）、状況はさらに複雑になる。

これまでの第二言語教育では、言語事項を特定してそれを教育内容とする構造的アプローチであれ、実際のコミュニケーション能力を養成しようとするコミュニカティブ・アプローチであれ、目標言語でのコミュニケーション活動を支え可能にする知識や能力や技能を特定することに腐心し、特定された知識等をカリキュラムに配分するという形で教育の企画が行われてきた。表現活動主導の第二言語教育を標榜する教育者はそのようなやり方に与しない。むしろ、学習者にとって重要な活動領域を特定して、その中で一定のゴールに至る一連の活動を企画する。カリキュラムの企画上で重要なことは、言語的な教育内容の特定と配分ではなく、特定された活動領域が学習者にとって重要であること（significant）とともに、活動領域が発達途上の学習者の表現能力と適切に関連していること（relevant）、一連の活動の課題が合理的に計画されていること（logical）、活動で作動するヒューリスティックな心理的働きが表現性の増強のために最適であること（optimal）である。そして、これまでのアプローチと対比した場合の表現活動主導の第二言語教育の際だった特徴は、言語的な教育内容を表現活動というトータルな過程の一部として作動するものと位置づけた上で、それよりもむしろ表現活動を中心に据えて活動全体を応信性が串刺し貫くように教育を企画することである。そのような教育デザインであってこそ、学習者一人ひとりの生きることそのものである応信性が活性化されて主体的で能動的な表現活動従事とそれに伴う学習を実現することができると考えるのである。

4　結びに代えて

本稿では、自己表現活動中心の基礎日本語教育と総合活動型日本語教育への関心を契機として表現活動主導の第二言語教育について論じてきた。表現活動主導の第二言語教育を上のように規定するならば、カミンズのアイデンティティ・テクストの実践やマルチ・リテラシーズ教育の観点での教育実践なども表現活動主導の第二言語教育の一種と言えると思われる。そうした表現活動主導の第二言語教育の拡がりについてはいずれ稿を改めて論じたい。

注

1）こうした点については、西口（2013）のpp.98-111で詳細に論じている。

2）それらはかれの本の「ダイアロジズムにおける言表の基本的役割」の節の最初のパラグラフからの引用である。

3）ここに言う多元的な認識の構造とその組織化をバフチンは結構（architechtonics）と呼ぶ（バフチン，1920-24/1999）。

4）ホルクイストも、異言語混交性との関連で「すべての言表は、その特殊性と多様性が実際上システム化不可能な諸力によって形成されている」と論じている（ホルクイスト，1990/1994、p.101）。

参考文献

※出版年が２つ書いてある場合は、前者が原著出版年あるいは執筆年で、後者が翻訳出版年である。

ヴィゴツキー, L.S.、柴田義松訳（1934/2001）『思考と言語』新読書社

ソシュール, F.、小林英夫訳（1916/1972）『一般言語学講義』岩波書店

西口光一（2012a）『NEJ：A New Approach to Elementary Japanese── テーマで学ぶ基礎日本語』vol.1 & vol.2 くろしお出版

西口光一（2012b）『NEJ：テーマで学ぶ基礎日本語指導参考書』くろしお出版

西口光一（2013）『第二言語教育におけるバフチン的視点── 第二言語教育学の基盤として』くろしお出版

西口光一（2014）「総合中級日本語のカリキュラム・教

材開発のスキーム」『多文化社会と留学生交流』第18号　pp.77-85.
西口光一（2015）『対話原理と第二言語の習得と教育―第二言語教育におけるバフチン的アプローチ―』くろしお出版
西口光一（2016）「調和のある創造的で優れた教育を実践するための教育実践ガイドライン」『多文化社会と留学生交流』第20号　pp.65-73.
ミハイル・バフチン、佐々木寛訳（1920-24/1999）「美的活動における作者と主人公」『ミハイル・バフチン全著作』第1巻　ミハイル・バフチン著、伊東一郎・佐々木寛訳　水声社
ミハイル・バフチン、北岡誠司訳（1929/1980）『言語と文化の記号論――マルクス主義と言語の哲学――』新時代社
ミハイル・バフチン、佐々木寛訳（1952-53/1988）「ことばのジャンル」『ことば　対話　テキスト』ミハイル・バフチン著、新谷敬三郎他訳　新時代社
ミハイル・バフチン、伊東一郎訳（1961/1988）「ドストエフスキー論の改稿によせて」『ことば　対話　テキスト』ミハイル・バフチン著、新谷敬三郎他訳　新時代社
ミハイル・バフチン、望月哲男・鈴木淳一訳（1963/1995）『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫
細川英雄（1994）『日本語教育と日本事情』明石書店
細川英雄（2002）『日本語教育は何をめざすか』明石書店
Berger, P.L. and Luckmann, T.（1967）*The Social Construction of Reality*. New York: Anchor Books. 山口節郎訳（2003）『現実の社会的構成』新曜社
Holquist, M.（1990）*Dialogism*. London: Routledge. 伊藤誓訳（1994）『ダイアローグの思想』法政大学出版局
Holquist, M.(1981) Glossary. In Holquist, M.(ed.), Emerson, C. and Holquist, M.（trans.）(1981) *The Dialogic Imagination*. Austin Texas: University of Texas Press.
Shannon, C.E. and Weaver, W.（1949）*The Mathematical Theory of Communication*. University of Illinois Press.